師匠のグッド・バイ

裏メニューの常連客〜山場〜

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18554885

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, モブお兄さん×霊幻, 銃姦, 目隠しプレイ

高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊です。今回は銃姦、目隠しプレイをしています。お好きな方はよろしくお願いします。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

裏メニューの常連客〜山場〜

相談所からの帰り道。
気まずい沈黙の中、ようやくシゲオが口を開く。
「ねぇエクボ。エクボはさ、僕たちが師匠を好きな事、知ってたよね？」
それは淡い恋。純粋な敬愛。どこか熟すのを待ってたような、真摯な愛。
「……そうだなぁ」
──そうだ。俺様はそれを知っていた。
「だからなんだよ？お前らが霊幻を好きだからって、俺が霊幻を好きになっちゃいけない法律でもあんのか？」
そうだ、そういう事にしておこう。こいつらが野花みたいに大事に眺めていた霊幻を、俺が先に抱いたら面白れぇだろうなぁ、と思った事は知られたら消される。
「好き？おかしいなぁ。エクボ、師匠のことを好きになったの、最近だよね？」
「……！」
「むしろ師匠を抱き始めてから好きになった。……そうだよね？」
驚いたな。他人の機微にうといシゲオにそんなことが……いや、違うか。
「芹沢さんが言ってたんだよ。明らかに師匠を見る目が変わった、って」
やっぱり芹沢か。敵意とか他人の感情に敏感に反応するように訓練されてきたアイツに、観察されていたのか……迂闊だった。
「でも、師匠にエクボの痕跡が残るようになったのは１ヶ月前ぐらいからだ。僕はそういう探知が苦手だから律にやってもらって確信したけど、やっぱりあれはエクボの霊力だろう？」
さて、どう言い逃れしたものか……。
「ねえ、エクボ。どうして師匠をレイプしたの？」
！？……どう答えるのが正解だ！？この際肯定しちまうか！？いやダメだ、これは罠だ。肯定すれば俺が面白がってシゲオ達に隠れて

霊幻を抱いたことを晒しちまう。ダメだ、肯定も否定も出来ない。
「……」
「否定しないんだね、エクボ。でも肯定もしない。これはどういう事だろう？」
律が思考を巡らせる。やめてくんねぇかなぁ……。
「レイプという状況じゃなかった。でも、合意という状況でも無かった。……脅迫？」
それは違う。ちゃんと合意ではある。
「違うのか。じゃあ……条件付きの同意？お金とか」
精神体の俺様は、身体が無いと、どうしたって感情が顔に出る。それをさっきから読まれて、どうしようもなかった。
「金で？そんなのでうんと言う人じゃないけどな、師匠は」
「……あのね、兄さん。くだらない都市伝説なんだけど……」
律は裏メニューのことをかいつまんでシゲオに話す。シゲオの顔がどんどん険しくなる。
「エクボ、師匠を買ったの？」
これにも肯定も否定もできねぇ。俺様がシゲオたちを面白がりながら霊幻を抱いた事実は変わらないからだ。
「その都市伝説、確かめよう」
シゲオと律がきびすを返す。
「あ、芹沢さん？ちょっと緊急事態なんだけど……」
シゲオが芹沢に電話する。
その目には、これまで霊幻に焦がれてきた分の愛情が、嫉妬と怒りに変わっていくのが、如実に現れていた。

ガチン。
相談所のカギをシゲオが超能力で開ける。
「……勝手にこんなことしていいのかよ」
俺様の苦し紛れの忠告はシゲオ達の頭を上っすべりする。
うーん。

……面白くなってきやがったぜ。

可愛い可愛いガキどもは、俺様の、悪霊の薄ら笑いに気が付かず、霊幻が大事に守っている相談所を荒らしながら、家探しをはじめた。
顧客のファイルを引っ張り出し、書類ケースをひっくり返し、引き出しの中をあさる。
「……この引き出し、鍵がかかってる」
かちゃん。
シゲオが霊幻の引き出しの鍵を超能力で開ける。開けて、しまう。
「事務所のスペアキーと……予備のお釣り……ん？なんだ、コレ」
シゲオが四つ折りの紙を取り出した時に、丁度芹沢が合流する。
四つ折りの紙を広げると、
Ａ：３０
Ｂ：５０
Ｃ：２００
と書かれている。
「これが、裏メニューじゃないかな……都市伝説の値段とも一致するし」
「……」
証拠を見つけてしまったことにシゲオはショックを受けて黙り込む。
が。
「師匠が、お金を貰って、いろんな人と……」
ごくり、とシゲオや芹沢の喉がなる。
いやあ。
想像しちまうよなぁ？そりゃあ。好きな奴を穢す妄想ってのは、楽しいもんだ。
健全な若者だもんなぁ。今晩のオカズは決まりか？はは。
「これだけじゃ唯のメモ書きだ。何か、他に……」
「ああ、そう言えば」
律に言われて芹沢がキャビネットの鍵を超能力で開ける。
「登記関係の書類で、なんかよく分からないのがあったんだよね」
書類を応接テーブルにぶちまける。あーあー、霊幻が大事にしてる部屋、めちゃくちゃだな。俺様は知らねぇぞ、っと。

「これだ。風俗営業許可書……これって、もしかして」
律が芹沢が取り上げた紙の写真を撮る。
「あとは……」
３人は霊幻のロッカーに目を留める。
かちゃん。
誰ともなくロッカーの鍵を、開けた。
隠すように……というより、隠して置いてあったトートバッグを引っ張り出す。
「うわ……」
腸内洗浄用の器具、アナル用ローション、色々なサイズのコンドーム。ある意味そのトートバッグこそが、決定的な売春の証拠だった。
３人が固まっている最悪のタイミングで。
「誰か戻ってきてんのか？いやー俺もよりにもよって財布忘れちゃって……」
悪運は強いが運は悪い、霊幻という男が相談所に入ってきた。
「……師匠、これは何ですか？」
シゲオが裏メニューと風営許可書、トートバッグを指差す。
「ああ、それはだなぁ」
一瞬も動揺せず言い逃れしようとした霊幻の頭をガッと芹沢が掴む。芹沢は反対の指先に超能力を鋭利に固めて、霊幻の喉元に突き付ける。
「……霊幻さん。超能力を使うと、嘘って案外簡単に見破れるんですよ、知ってましたか？」
「……へぇ。で、これはどう言うつもりだ、芹沢？」
「痛くはしないです。ただ、肌に痕が少しの間残るだけです。……困るでしょう？霊幻さん？」
「そんなもの、困るわけ──」
パチっ、と霊幻の頭と芹沢の手の間で静電気が走る。
「ウソですね」
「──！」
表情は崩さなかったが、霊幻がそっと唾を飲み込んだのがここまで伝わってきた。

「これから俺たちの質問に答えてください。……嘘、偽りなく」
「なんで俺がそんなこと──！」
「お願いですから、もうこれ以上、俺たちに嘘をつかないで、ください……」
「芹沢……」
「……霊幻さん、あなたは売春をしていますか？」
「──！」
パチパチと静電気が爆ぜる。霊幻が頭をフル回転させて言い訳を考えているのだろう。だが、それのことごとくがバレている、そんな音だ。
ダメだ、これはマズい。
俺様はそっとこの場から離れた。

※※

「──っ、ああ」
諦めて少し俯いた霊幻が、小さな声で売春を肯定する。芹沢や茂夫が息を呑む音が場に響いた。
「……穢らわしい」
律が吐き捨てた言葉が霊幻に刺さって、顔を歪めさせた。
「霊幻さん、あなた兄さんや芹沢さんが危険な除霊に行ってる時に、オッサンに抱かれて喘いでたんですか？」
「違っ──」
パチ、と静電気が爆ぜて、霊幻は言葉を止める。
「そんな、時も、あった。でも基本的に俺は監督責任を果たして──」
「霊幻さん」
薄ら寒く、律がわらう。
「オジサンに抱かれるのは、気持ちいいですか？」
さーっと霊幻の顔が青くなる。
「答えなければそれはそれでペナルティですよ」
芹沢が指をキラリと光らせて見せる。
「気持ち、いい」

絶望の表情をしたのは、霊幻だけではなかった。芹沢も茂夫も、青くなっていた。
しかし律は何処か楽しそうに質問を続ける。暴く楽しさを感じているのだ。
「今までに何人ぐらいに抱かれました？」
「……２０人、ぐらい」
「思ってたより少ないんですね。初めて抱かれたのはいつです？」
「……２６、の時」
茂夫が息を呑んだ。何か思うところがあったらしい。
「好きな体位とかあるんですか？」
「……バック」
「犬みたいに犯されるのが好きなんですね」
「……うん」
「優しくされるのが好きですか？それとも激しい方が好み？」
茂夫が律の袖を引く。ヒートアップしている律は止まらない。
「……激しい方」
ぽろ、と霊幻の目から耐えきれず、涙がこぼれた。
「５年近く、僕たちを騙して嘲笑っていたんですか？童貞のハグれ者たちなんか、チョロいって」
「！それは違う──！！」
「律！！」
静電気は流れない。茂夫が何かマズいと声を掛けた時。
「ぉおるらららららぁっっ！！」
身体を取ってきたエクボが、芹沢に金属バットで殴りかかった。

※※

防御に芹沢が両手を使う。金属バットは弾けてひしゃげ折れた。
「こっちだ、霊幻！」
「──っ、エクボ……っ！」
その隙に芹沢の腕の中から逃げ出して、霊幻が俺様の後ろに隠れた。
「俺に対して祈れ、霊幻！『助けて』って──！」

「……っ！」
霊幻は目を閉じて、両手を組み合わせて俺様に必死に祈る。
その強い祈りが、一時的に俺様の霊力を増幅させる。
バチィ！
増幅された霊力で強化されたバリアが、いつもは敵わない超能力者達の攻撃を弾いた。
「──エクボ。師匠を返して」
「返す、返すだぁ！？お前ら見えてねぇのか、怯えて傷付いて、お前らから必死に逃げようとしてる霊幻が！！」
シゲオが動揺する。
「満足したか？霊幻がお前らを守るためにも、必死に隠そうとした事を、チンポおっ勃てながら無遠慮に暴いて、傷付けて泣かせて、目的は達成できたのかよ！！」
「ち、違う──」
シゲオが青い顔をしてゆっくりと首を振る。
「僕たちは、ただ──師匠が、好きで……っ！」
霊幻が驚いて息を呑む。良かったな、モテモテだぜ、お前。望んでなかっただろうけど、な。
「霊幻が売春してて、それがテメェらに何の関係があるんだよ？勝手に惚れて、勝手に裏切られて、クソ寒ぃ童貞仕草してんじゃねぇよクソガキどもが」
「エクボお前っ……お前も僕たちを裏切ってたくせに……っ」
「あ？俺様は金払って、ただ霊幻を買ってただけだ。霊幻にとっちゃあ客の１人にすぎねーんだよ、律っちゃん。……そんな俺が、何をどう、お前らを裏切ったって？」
ぐるりと３人を見渡す。
ニヤっと俺は笑った。
「ああそうか……お前らもヤれるならヤりたいもんなぁ？霊幻と」
「「「！！」」」
「ヤりたかったよなぁ？金さえ払えば抱けたんだもんなぁ、本当なら。抜け駆けされりゃあ面白くないわな。自分が先に買いたかった、ってか？」
「ち、違──」

「聞きたいか？買われた霊幻がどんな顔でキスして、よがって、あえぐのか──いてっ」
霊幻につねられたので、これくらいにしておこう。
「ともかく、お前ら、相談所をこんなに荒らして、霊幻を辱めて、覚悟はできてるんだろぉな？」
「かく、ご？」
「相談所も霊幻も、明日から失う覚悟だよ」
かひゅ、とシゲオ達の喉が鳴る。
「師匠──その、僕たち──そんなつもりは──ただ、売春を、辞めて、欲しくて──」
赤くなったり青くなったりするシゲオ達に。
ふ、と聖母のように。
「……なら、大丈夫だ。もう、辞めるつもりだからな」
愛おしくてたまらない、というふうに霊幻は笑って。
「……明日は、いつもの時間に来るように」
やっぱり無償で高価な愛を、惜しみなく降り注ぐのだった。

今後、裏メニューについて、シゲオ達は触れようとしなくなった。
それは暗黙の了解となって……俺様はほくそ笑んだ。

──これで相談所での味方は俺様だけだなぁ、霊幻？

※※※※※

「じゃあ、俺様は身体を一旦返してくるから──」
きびすを返そうとした俺を、がしっと手を掴んで止める霊幻。
見ると、手が震えている。
「……」
俺様は黙って霊幻を抱き締める。
こいつはこうやって、全部自分の中で飲み込んで、そうやって生きていくんだろうな……。
「……ありがとな、落ち着いた」
しばらく俺様と抱き合ってから、霊幻は身体を放す。

「……すぐ戻ってくるからよ」
霊幻と分かれて、元守衛のアパートに歩き出す。次第に早歩きになり、俺様は駆け出した。
布団に身体を突っ込んで、霊体になった俺様は超特急で霊幻の元に飛んで戻る。
「……えくぼ」
近くの公園で座って待っていた霊幻は、俺様の姿を見て、儚く笑って手を伸ばしてきた。
「なぁ、お前さ……その姿でも、俺のこと好きか？」
「はぁ？あ？あー、肉欲が無くても、って意味か」
「……ああ」
真剣だ。
霊幻は真剣に俺様を見ている。が、その瞳には、微かな……欲の光が見えた。
「……好きだぜ、霊幻。俺ぁ魂でお前が好きだよ」
ぶわっと霊幻が首まで赤くなる。
「ただし、だ霊幻。先に言っとくが、俺様、霊体でも性欲ってのはあるからな？それは分かっとけよ」
「？それは、どういう……」
「理性欲、って言うのかねぇ。理性的に感じる性欲だよ」
「？？？」
「正味、肉欲で突っ走れるのはごく少数だと思うぜ。例えばお前、ヌく時オカズいるだろ？」
「え……」
「まぁこの際どっちでもいい。これだけＡＶだのエロ漫画だの官能小説だのが売れるってのは、人間、ただちんこ擦ってりゃ興奮できるのはごく少数ってことだ。たいていの人間は、好みの人間を視認したり、シチュエーションを求めたり、キャラクターの痴態を認識したり、そうやって理性を刺激しなきゃあ勃たないのさ」
「……」
「それを俺様はお前に感じてる。詐欺師まがいのお前の口がフェラで塞がれたりとか、喘ぎ声で言葉にならなかったりとか、そういうシチュにはめちゃくちゃ興奮する。精神的な勃起だよ」

「なるほど、分かった」
くす、と微笑む霊幻が綺麗で。
「馬鹿だな、お前。そんなの黙って、純愛だって言っておけば、いいのに」
──愛おしくて、たまらない、と──
そんな顔でふいに笑いかける霊幻に、俺様は無い脳髄まで震えた。

※

ケツモチのマサから霊幻のもう１つの携帯に電話がかかる。
「急だな……。ちょっと早いけど、ここまで迎えに来るって」
霊幻の顔が引き締まる。『仕事』の顔だ。
「おい霊幻、今度は先に言えよ？もうウリ辞めるって。セックスしてから言うんじゃねぇぞ」
「えぇ？前のタイミングそんなに悪かったか？」
「最悪だったぞお前」
「マジか。へいへい、分かったよ。……じゃあ今日も頼むな、えくぼ」
金も払ってねぇのに、ふわりと愛らしく笑う霊幻に調子が狂う。なんだこいつ、なん……突然……。
……でもないか。俺、地味に、こいつのピンチに早速と現れてんのか……。
ふむ。計算外だが、悪くねぇな……？

「霊幻さん、頼まれてたものッス」
マサが霊幻にトートバッグを渡す。
礼を言った霊幻は公園の公衆便所に消えていった。
マサはそれを見送りながら、大きなため息をつく。
「……こんなめちゃくちゃな時間に霊幻さん呼び出して……」
イライラしながらタバコに火をつけるマサ。今回の客も厄介そうだ。

※

「ラォゴン（※中国語で旦那、ダーリン的な意）！会えて嬉しいぜ」
「霊幻新隆、ワタシも会いたかったヨ」
──中華街のど真ん中の、豪華な中華風の屋敷で。
霊幻は漢服姿のキツネ顔の男に抱きしめられている。
……屋敷の周りには、スモークの貼られた黒い高級車が沢山停まっていて、キツネ顔の後ろには屈強な男たちが微動だにせずに立っている。
もうね、８割がたアレじゃん。マフィアじゃん。チャイニーズマフィアのお偉いさんってやつじゃん。
こいつの常連、本当に厄ネタばっかりだな！？
貿易商なんてマフィアが良く言い訳で使う職業を使ってる時点でクロだろうなとは思ってたけどぉ！？
屋敷の規模からして、相当なお偉いさんだぞ、このキツネ顔……。
「ウォーアイニー、霊幻新隆……」
「んっ……あ、そうだ」
口付けを受けながら、霊幻は天気の話でもするように……おい馬鹿もっとタイミング読め！
「俺、売春辞めることにしたから。だから、今日でこういうの、お終いにさせてくれよな」
ビキリとはっきりとキツネ顔の額に青筋が浮かぶ。
「きいてないヨ？」
「ごめんな」
「ネェ新隆……新隆の愛の言葉は全部嘘だったの？」
「いや娼婦のリップサービスを真に受けるなよ」
霊幻！！それは！！悪手！！
キツネ顔の額の青筋が増える。
「……少なくともワタシは本気だったヨ」
「ラォゴン……」
「ねぇ新隆、考えなおしテ？もう新隆無しの人生なんて、考えられないヨ」
ちゃき。

部下から受け取った大ぶりの拳銃を霊幻に突きつけながらキツネ顔が懇願する。
銃を出された霊幻の顔がさーっと青くなっていく。
うーむ、どうしたもんかね。
「こっちだヨ、新隆」
両手を上げてホールドアップの姿勢を取った霊幻の背中に銃を突きつけ、キツネ顔はベッドまで誘導する。
豪奢な中華風の室内で、霊幻の安いスーツは浮いていたが、その異質感が妙にエロティックだった。
「脱いデ？」
「……分かった」
霊幻は無造作に服を脱いで足元に落としていく。
キツネ顔はすすす、と銃を霊幻の肢体に滑らせた。
「んっ…」
冷たい銃身に霊幻が身じろぐのを、冷徹に見据えている。
「ワタシは今、キミをどうしようか考えているカラ、その間キミはコイツに相手してもらうとイイ」
キツネ顔は銃口を霊幻の唇に突きつける。
「ん……」
跪いた霊幻は目を伏せてまつ毛を震わせながら、おそるおそる銃をフェラしはじめた。
黒い銃身をサクランボ色した霊幻の舌が這う。
「ぁぐっ……」
霊幻が喉奥まで銃を受け入れた。
それを見てキツネ顔がごくりと喉を鳴らす。昔されたイラマチオでも思い出したのだろう。
「……もうイイ。ベッドに乗って、脚を開いテ」
霊幻は言われた通りにする。
その後口に、ぐっ、と銃口をキツネ顔が押し込んで、霊幻ははっと息をつめた。
「ねぇ新隆、イっちゃダメだよ？イったら、引き金を握るからネ──」
ずちゅ、ぐちゅ、とキツネ顔は銃身の抽挿を始める。

「あ、あああっ、あっ」
霊幻は恐怖に青くなりながらシーツを握る。霊幻の慣れた身体は無機質な黒鉄にも快感を既に拾っている。くそっ、キツネ顔が撃鉄を起こしたら、何とか憑依するしかないか……！？
「ネェ、霊幻新隆。……命乞いしてごらん？」
怯える霊幻に気を良くしたらしいキツネ顔が楽しそうに言う。
「こ、ころさ、ないで……」
「どうしようかなぁ」
ぐちゅぐちゅと霊幻を犯す銃がイイ所を掠めたらしい。鋭い喘ぎ声が上がった。
「し、死にたくないﾞ……っ」
ぐしゃぐしゃになった霊幻の顔からぼろぼろと涙が落ちる。
「……何でもするカ？」
「うん、するっ、何でもするからぁ……っ、あ、あ！」
びゅる、と霊幻が精を吐いて。
チキキ、とキツネ顔が撃鉄を起こした。
「ひ……っ！」
「なあんてね」
キツネ顔はヘラっと笑って銃を霊幻のナカから抜く。
ゴトリとサイドテーブルに置いた。
「可愛い新隆を殺すわけないじゃあないカ。売春を辞めるんだろウ？結構結構。もう売春は辞めて、ワタシと暮らそう？」
キツネ顔は恭しく霊幻の左手を取る。
「……っ、ラォゴン、俺は、誰の物にもならない……」
「だったら、ワタシ無しでは生きられないようにしてあげよう」
つつ、とキツネ顔が霊幻の太ももをなぞる。
「自分じゃ移動できないように、足を切り落として」
つつ、と次は腕をなぞる。
「自分じゃ食事も取れないように、腕も切り落とそう」
「ラォゴン……」
霊幻の目には。
憐れみしか、映っていなかった。
「残念だよ、ラォゴン。円満に別れられなくて」

カタカタカタ、と震えて。
銃が、ひとりでにバラバラになる。
「ハ！？」
「ラォゴン、俺には悪霊がついている。嫉妬深い悪霊だ」
ピシピシピシ、と窓ガラスにヒビが入る。
ようし、仕上げだ。
「彼を怒らせないでくれ、ラォゴン」
ヒュン、と壁にかかっていた青龍刀が飛んできて。
キツネ顔の服を裂いて、ビィィンと壁に刺さって振動した。
「あ、ぁ……」
キツネ顔がへたり込む。
霊幻は服を着て、部屋の出口に向かう。
「──愛してたよ、ラォゴン。さようなら」
ギリ、と。
キツネ顔は、歯を鳴らした。

※※※※※

「ほんっとにお前はロクな客がいねぇな！？」
ベッドに霊幻を押し倒しながら俺様は叫ぶ。
「えー？お前がいるじゃん」
「俺様、悪霊だぞ？１番ヤバいわ馬鹿」
くすりと霊幻が笑う。
「なぁ、エクボ。俺さぁ、死んだらやっぱりお前に喰われるわけ？」
「バッカお前そんなことしたらシゲオに一瞬で消されるわ！」
「なぁんだ。つまんねーの」
ごくりと食欲で喉が鳴る。あまり煽らないで欲しい。うっかり無防備な魂に噛みつきそうになる。そういうはしたない悪霊じゃねぇんだよ、俺様はよ。
「ん？今日は目隠しすんの？」
「嫌か？」
「別にいーよ」

霊幻が脱ぎ捨てたネクタイをキッチリ頭に巻き付け、ベッドに横たえた。
「乳首に触るぞ」
身構えた霊幻の……性器に触る。
「あっ！？」
予想外の刺激に太ももをびくつかせる霊幻。
裏筋を撫ぜて先端をくるくると円を描くように弄れば、すぐ達しそうになる。
「次は、アナルに指入れるからな」
すんでのところで性器へのいたずらを止めて、すいっと脇腹を撫で上げる。
「あひっ！？」
そのまま乳首をイジれば、思っていなかった刺激に霊幻は息を荒くした。
「んっ……く、ふぅっ……ふぁっ……」
黙ってもう準備してあった後口にチンポを挿入する。
「あー……っ！」
びくびくと震えながら反り返った霊幻が、おそらく甘イキした。
「ぁがっ、ぐうっ、い、今っ、イってる、からっ、」
ずり上がって快感から逃げようとする霊幻の細腰をつかみ、ずぱんと奥まで犯す。
「〜〜〜〜〜〜〜っ！」
ぶわ、と全身に鳥肌を立てて、霊幻がメスイキした。
霊幻はいつも、上手に腰を動かして、客の逸物が自分のイイ所に当たらないように逃げている。開発されすぎた身体は、すぐイき狂うからだ。
目隠しをされると、それが出来ないことに、今更ながら気が付いたらしい。
ゆるゆると抽挿を再開すると、ビクビクビクっ、と媚肉が痙攣した。またイったらしい。
「イっ……てる、から……待っ、て、………………ああああああ！！」
パンパンと思いっきり腰を打ち付けると、激しく髪を振り乱しなが

ら霊幻が身悶える。
たまらなくなって目隠しを外すと、トロリとした涙で目を潤ませた卑猥な表情が出てきて、ぐぐっと俺様の怒張が増した。
「ああっ！イく……っ、またぁ……っ！！」
ゴリゴリと夢中でうねる霊幻のナカをえぐる。
「ぁあ……っ」
最奥に叩きつけて擦り付けたら、再度のメスイキに掠れ声を上げた霊幻が、悩ましげにシーツをたぐりよせた。

※

「……売春を辞めたらさ、俺って何の価値があるんだろうな」
「は？」
性の匂いが残る部屋で、霊幻がベッドに大の字になりながらぽつりとこぼす。
「これまで高いお金で買ってもらってたのって、それなりに、その、自己肯定感あったんだな、って思って。……身体を求められなくなった俺って、何になっていくんだろう」
「……価値が欲しいのなら、俺様がそれを証明してやるよ、霊幻。お前はな、エロい」
きょとんと霊幻が俺様を見る。
「金が絡もうが絡まなかろうが、お前の身体は極上品だよ。自信持て」
ふはっと霊幻が噴き出す。
「ちんぽおっ勃てながら言われたらすげぇ説得力あるわ」
「だろ？もう１ラウンドやろうぜ」
ゴソゴソと俺様もベッドに上がる。
「ん……分かった……っぁ、」
本当は。こいつのひたむきな頑張りとか、規格外の優しさとか、そういうのを言ってやっても良かった。
「えくぼ……ん、好き……」
でも自分嫌いなコイツが求めている答えは、そうじゃないと俺様は思う。

「あっ……そこ、気持ちいい……」
コイツに取っての褒め言葉は、ちょっと傷つくぐらいが、丁度いいのだ。

「えくぼ……犯して……」

おおせのままに。

続